

# 他者と世界に ひらかれていくからだを

文部科学省が全国の小学校5年生と中学2年生を対象に実施している「体力・運動能力、運動習慣等調査」の2014年度の調査結果が12月に発表された。そこでは小5女子において、小学校入学前に経験していたからだを動かす遊びが「同じ内容」だった子どもよりも「いろいろな内容」だった子どものほうが体力総合評価が高かったことから、「幼少期の多様な運動経験」の必要性が強調されていた。幼少期のからだを動かす多様な遊びの経験は「体力」だけでなく、ぶつかりあったりふれあったりしながら自己を調整し他者と交流するからだが育まれることにつながっているだろう。

一方、子どもたちが自発的に遊びまわる「時間」「空間」「仲間」の「3つの間」が失われているといわれて久しい。ゲーム世代の親たちは幼児期からゲーム機で遊ばせることに抵抗はない。汚いものに触らせたくない、けんかをしたりケガを負ったりしないようにと願う親たちは、おとなに管理されたスポーツ教室で遊びを体験させ、体力をつけさせようとする。そんな幼児期の生活や遊びの変容は、子どものからだに何をもたらすのだろうか。

子どものからだがおかしいと嘆くだけではなく、他者とともに生きる人間のからだを育む文化を保育や教育の場で意識的につくりだすことが求められている。子どもたち自身が自分のからだを大切に育んでいく文化を、どうつくりだすことができるかを考えてみよう。